

73年目の鎮魂と反核の8月一昇レッスン続く！



□ 8月3日(金) 18:00～20:30 昇定例レッスンが開催されました。

佃さんの体操と吉岡さんの「滑舌の訓練」(「早口言葉の歌1, 2」)、千秋さんのヴォイストレーニングのあと、本並先生の指揮でまず「ねがい」を1時間レッスンしました。休憩をはさんで、引き続き、「君死にたまふことなかれ」を約1時間、細部の表現についての指揮者の鋭い指摘を踏まえ、9月9日の大阪のうたごえ合唱発表会に向けて、8月の今を、臨場感のあふれる表現で「君死にたまふことなかれ」と本番並みの合唱となりました。ピアノ伴奏は西應静さん。参加者は全34名でした。

□ 指揮者よりひとこと (「君死にたまふことなかれ」)

○ 曲冒頭部の演奏について、その意味するところについて・・・

突然強く駆け上がるピアノ伴奏と低音部「オー」のクレッシェンド、続いて高音部「オー」のクレッシェンドからの「オー」が徐々に消え入っていき完全に静まりかえる。そして曲のモチーフを静かにピアノが奏で始める。日露戦争 203 高地の攻防では、日本陸軍兵士の一斉突撃とそれへの露軍トーチカ(高地)からの機銃照射による日本軍の無残な敗退が何度も繰り返された。曲冒頭では、繰り返されたこの作戦の無意味さを告発?していないか。突撃命令、高地へと駆け上がる兵士の怒号とその後の沈黙を表現しているのではないか、「オー」を歌う心持ち、音色に気持ちを込めてほしい!

○ 今日の歌い方について、・・・音と響きとことばが軽い。“もっと”重み“をもって表現して欲しい! 全体にわたっていえる。例えば、28小節～「りよじゅんのしろはほろぶとも ほろびずとともなにごとぞ・・・」62小節～「なげきのなかにいたましく・・・」表現が軽い! 軽く聞こえる! もっと重々しい音色で! 高くなる音程の声、音色を変えない! この曲にふさわしい声で、もっと感情をことばに! T2・32小節「なかりけり・・・」もしっかりと言葉表現せよ!

BS・BR20小節～「さかいのまちのあきびとの・・・」リズム・ことば揃えて! もっと重々しく、軽い響きは駄目! 重く歌ってほしい。「おやのなをつぐ・・・」は「おおお」と「お」が3つあるくらいに出す。「おや」と聞こえない! 後半の® Poco

piu mosso(ポコ・ピウ・モツソ:やや今までよりもすぐに早く躍動して)72小節～ リズム速くなったからといって、「のれんのかげにふしてなく・」軽く飛んだように歌わない！もっと感情をこぼに込めて、しっかりと歌ってほしい！
アインザッツを揃えることに注意して！

□「ねがい」：佐藤信作詞・林光作曲。 昴はこれまでのコンサートで、6・7・8・9・10回と連続5回演奏してきた昴の「定番曲」です。今回の12回コンサートでもプログラム第1ステージの4曲の中核的な1曲として歌います。10回コンサート以降に入団されたメンバー、またパート間移動されたメンバーにとっては新曲です。何度も歌ってきた団員も新たな昴の創作曲と位置付けて、新しい「ねがい」を創り上げましょう！

(参考資料)「ねがい」について、webに掲載されていた解説を転載します。

ねがい 佐藤信作詩／林光作曲

ポーランドに「連帯」と呼ぶ労働組合を中心とした人々との集まりが、政府に反対して、ほんとうの自分達の町と国を造ろうと運動を起こしたとき、それに共感した林 光や詩人の佐藤 信たちが支援のコンサートを催したときの作品の一つ。

ショパンの国ポーランドの”私達がここにいる限りポーランドは滅びない。”と歌う国歌も素敵なマズルカ。

林 光は、「ねがい」のピアノ部分にショパン風の断片を散りばめ、更に終わり近くには、力強いピアノ独奏で国歌を取り入れ、最後にもう一度”小さな川に……”と ねがい つづけるのが印象的である。

(櫻井 武雄)

07年日本のうたごえ祭典合唱曲集所収。1982年、ポーランド民主化のために活動していた自主管理労組「連帯」支援コンサートで発表された。ポーランドの国歌、国民的作曲家ショパンを活かした作品。当時のソ連・東欧で初めて政府、党から独立した労働組合として生まれた「連帯」は81年12月の戒厳令によって弾圧される。作曲の林光は、ワルシャワの街頭デモが、消防車の猛烈な放水で倒れそうになりながらも国歌を歌い続けるニュース画面に感銘を受けたという。83年に戒厳令は解除され、後の民主化に進んだ。

合唱指揮者・櫻井武雄はこの歌について「ピアノ部分にショパン風の断片をちりばめ、終わり近くには力強いピアノ独奏で国歌を取り入れ、最後にもう一度「小さな川に一と願ひ続けるのが印象的」と綴っている。 ※うたごえ新聞 2007年7月2日号歌の小箱 NO.68 より

林 光 『ソング』から 「うた」「石ころの歌」「花の歌」「ねがい」

林光の作品には「ソング」と呼ばれる膨大な数の歌がある。それらの歌のうち、かなりのものが政治的な動機により作られている。今回選んだ曲も、例えば「うた」と「ねがい」の2曲は1982年ポーランド「連帯」支援コンサートのために作られたものである。そうした事実は、この作曲家が鋭く社会と向き合いながら作曲を続けてきた姿勢を示すものに他ならない。しかし同時に、林光の「ソング」はそうした作られた動機を離れて歌い継がれ、いわば「民謡」のように愛唱されている。それは、まさに「ソング」と呼ぶに相応しい。そして民謡が「古い革袋に新しい酒を盛る」と言われるのと同じように、今なお歌われるたびに新鮮に、深く鋭く人生を語りかけてくる。

(グリーン・エコー第49回演奏会「曲目解説」より)